



私が幼児教育を志した頃 (20)

津守 真

一九五二年秋—進歩主義教育

私はミネソタ大学でDr. エリザベス・メチャム・フラーの幼児教育の演習を引き続きとりつづけていたが、学生たちには幼児教育よりも、新しく台頭してきた心理学の方が人気があつて、彼女の幼児教育演習をとる学生は少なかった。当時の米国では進歩主義教育の実践は多くの幼稚園に浸透していて、どの幼稚園でも遊びが主流であつた。ミネソタ大学児童研究所長を二十五年間もつとめておられたDr. ジョン・E・アンダーソンは科学的方法論については厳密さを要求したが、幼児の生活には理解があり、子どもの遊びを支えることが児童心理学の当然の任務と考えていた。Dr. アンダーソンはホワイトハウスカンファランスの委員もしていて、第二次世界大戦直後の米国教育研究報告書一九



四六年版の幼児教育の部の執筆者であった。

私は前から何度も書いたように、進歩主義教育がどのようにして発展してきたのかに関心があり、キングダーガルトン・メッセンジャー、キングダーガルトン・レヴューなど、日本では到底見ることはできない幼児教育の文献がミネソタ大学図書館にあるのを知って、時間を作っては図書館で興味のある部分を筆写していて、その論文を完成したいと考えていた。一九五二年十月半ば、私は進歩主義教育の歴史のアウトラインを作って Dr. フラーに見せたところ、「あなたはどこでこのような研究法を勉強したのか、日本の大学は良い教育をしている」と彼女は直ちに言った。当時の日本の大学では自分の興味を追求することが学問の前提と考えられていたから、学生は大学で授業に出るよりも、図書館や実験室で過ごす方が重要と考えられていたから、米国の大学は知識は広くなるけれどもその点で物足りなかった。私はお茶の水女子大学附属幼稚園の歴史を語り、遊びを幼児教育の根本と考えれば、米国の進歩主義教育運動は実に興味深い、日本の幼稚園教育の指導者倉橋惣三はパティ・ヒルやスタンレー・ホールの影響を受けていることを Dr. フラーに述べた。(この頃倉橋先生は「子供讃歌」を『幼児の教育』誌に連載しておられ、父が毎月送ってくれるその雑誌を私は読んでいた。)

十一月の末のある日、午後三時から Dr. フラーの演習のあと、彼女と一緒に教室を出て歩きながら、彼女は、ジョン・デューイが最近死んだ、モンテッソリも死んで寂しくなったと言った。デューイの教授生活の振り出しはミネソタ大学で、ここからシカゴ大



学、コロンビア大学に移ったのである。キャンパスのメンバーの並木が夕陽に赤く映えていた。戦争も終わってひとつの時代が通りすぎようとしていることを私共は思った。

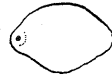
一九五二年十二月半ばに私は指導教官のDr.ハリスと、研究所長のDr.アンダーソンとDr.フラーとの連名で児童研究所の所長室に呼ばれた。私はこわごわ行つたところ、この論文を学位審査に正式に受理することに決定したと告げられ、期日までに所定の用紙にタイプで打って提出するようにと言われた。幼児教育における進歩主義教育の歴史を扱った書物は一九〇七年以来なかったので、そのことも有利だったのだと思う。

(その後、一九五五年に進歩主義教育協会が解散された。更に後に、一九六八年にハリス教授が日本に來られたとき、私が進歩主義教育に関心があつたからとローレンス・A・クレミン著『学校の変貌、アメリカの教育における進歩主義一八七六一一九五七』(一九六一年出版)を土産にもつてきて下さつた。そして『児童教育に挺身した不屈な婦人たち一八五六一一九三一』がACEIから出版されたのは一九七二年である。その後の米国の幼児教育の展開は複雑である。それにもかかわらず、進歩主義教育運動は幼児教育における遊びの復権という意味をもち、現代にも重要性を失っていないと思う。)

Dr.フラーはそれから間もなく自動車事故で突然に亡くなった。

ピルグリムファウンデーション(キリスト者学生会館)をめぐる人々

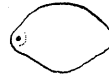
私は一度勉強に専念しなければ論文を完成することはできないと考え、そのために家



庭遍歴を中断して、ピルグリムファウンデーションに泊まることにした。一九五二年十一月十三日、トームス夫妻の自動車に荷物を積んで、ピルグリムファウンデーションに引越した。ピルグリムファウンデーションは学生のクラブだから、他人に煩わされることなく勉強できた。しかしそれなりにいろいろの方にお世話になったし、そこに集まる人たちは興味深かった。

若夫妻―シユタウファー夫妻

三階の私の部屋の隣には、私と同年配の新婚早々のシユタウファー夫妻が住んでいて、毎日電気掃除機をかけ、芝生を刈り、建物の管理をしていた。リー・シユタウファーは保健学科の学生で、奥さんのダナは看護学科でオキュベーションセラピーを勉強していた。まるでハリウッド映画から出てきたような若夫婦だった。私共は食事は一階のキッチンでめいめい作るので、彼等がチリビーンズやチャップスイを作ると私の鍋に分けてくれた。リーはネブラスカの出身で、クリスマスの休暇のときには故郷に帰るので、そのときには大きな建物の中に私は一人になり勉強するには有難かった。何よりも有難かったのは、タイプライターを使わせてくれたことだった。論文を仕上げる間約三カ月彼等の新しいタイプライターをほとんど専用に使ったのに彼等は一言も文句



を言わなかった。それから長い年月の後にリーはミネソタ大学の保健学部の学部長になり、ダナは自分の家にアトリエをもって絵を描いていた。四人の子どもはいまは成長し、夫婦は気候の良いフロリダに移住した。

レヴェラント・ケンネス・ウエード

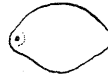
ピルグリムファウンデーションには学生のための専任の牧師がいて、二階にオフィスがあった。端正なアメリカ人牧師で、北川先生やサイデイ牧師のような大胆なところがなくて、常識家だった。学生たちと読書会をしていて、テキストにトルーパーッドの本を使った。それはあまりにもアメリカ的オブティミズムで、戦時中に苦勞された矢内原先生の聖書研究に出席していた私には物足りなくて、レヴェラント・ウエードとはよく議論をした。彼は私の話すことに辛抱強く耳を傾けてくれた。私共は最後まで友人であった。

学生たち

ピルグリムファウンデーションにはかなりの人数の若い学生たちが集まった。女の子と遊ぶために集まってくる学生も多かったが、その人たちも、聖書研究会ではよくしゃべり、まじめな会合のあとには、スクウエアダンスをした。夜遅くに帰るとき、だれとだれとが一緒の車で帰るかを見てみると交友関係が分かって面白かった。政治学専攻の



大学院学生のポウルは、敗戦時の日本では東久邇宮首相が一億総懺悔ということを言ったが本当かと私に尋ねた。私にはまだ記憶に新しかったことで、戦時中の言論について日本人のだれもが多かれ少なかれ反省していたのは事実だと言った。青年も軍部に対して心の中では批判しても、恐れて口に出さなかったことを反省したことを述べた。彼はそれでは責任ある人々が何も反省していないにひとしい、いまにこれは反米になると言った。後になって私は彼が皮肉をこめて言ったことは当たっていたのではないかと何度も考えた。ピルグリムファウンデーションに集まる学生のなかには、アメリカの機械文明を批判してキリスト教はどう答えるのかと議論する学生もいた。まだコンピューターは登場して、環境問題も意識されていない時代であった。そういう人たちも皆、ミネソタ湖畔の一泊修養会には参加して、夜になるとキャンプファイアでカントリーやニグロスビリチュアルを歌った。これが一九五〇年代のアメリカの青年の一側面で、だれにも親切で、善良な人々であることがよく分かり、気持ちよかった。だが、敗戦を体験してきた日本の学生とは背景があまりにもかけはなれているのを感じた。建築専攻のピート・ノーラムは、現代的な若者だが、宗教心があつく、ピルグリムファウンデーションでは中心的な役割を果たしていた。夜の会合で遅くなると私を家まで送ってくれた。そのピートの車にいつの頃からか女の子が一緒に乗って帰るようになった。セントポールキャンパスの食物学科の学生のベティ・ブレッケンリッジで、料理が得意だった。この人が来るとおいしいパイが食べさせてもらえて、この人がいると皆が落ち



着いた気分になった。間もなく私は彼女の父親がミネソタ大学の自然博物館の館長なのを知った。一年前に私をはじめてミネソタ大学にきたとき、サイディ牧師に紹介され、世界的に有名な鳥類学者なのに少しも偉らぶるところがなかった。ベティは、ピルグリムファウンデーションでピートと並んで礼拝の司会をした。私がミネソタを去って間もなく二人は結婚した。ずっと後、一九八五年に私共がミネソタに行ったとき、二人の家に招かれた。子どもが二人いて明るく賑やかな気分があった。ピートは建築家で、ミネアポリスの古い建築物の保存に一生懸命になっていた。ミネソタのコングレゲーション教会の信徒代表をしていた。ベティはアメリカ家政学会の役員をしていたが、「大きな森の小さな家」で有名なローラ・インガルス・ワイルダーの研究家で、彼の家のひと部屋がインガルスの記念室になっており、あの時代の食器や家具などが陳列されていた。それから間もなくベティが死んだという知らせを受けた。私がアメリカに行く度に彼等はピルグリムファウンデーションの同窓会をしてくれたり会いに来てくれた。ベティの葬儀には彼女の好きだった芝居的一幕が上演されたという。ピートは目を赤くして言った。

若い音楽家

ピルグリムファウンデーションでは大学から帰る時間も自分の自由だったから、私は図書館に夜遅くまでいることがしばしばだった。ある寒い晩に、外套の襟を立ててキャ



ンバスを歩いて帰ってくると、東洋人の青年に出会った。私が声をかけると日本からの夏来たばかりの十九歳のピアニストで、楽譜を筆写してアルバイトをしていた。久し振りにあった日本人にとっても懐かしく感じた。翌日に早速ピルグリムファウンデーションに昼食に誘った。シヨパンやシューベルトのピアノ曲だけでなくベートーベンのピアノコンチェルトまでも頼めばすぐに弾いてくれてだれもが驚嘆した。後に現代音楽で世界的に有名になった「柳慧である。「とっし」と私共は呼んでいた。一晚私はとっしをトームス家に連れていった。トームスさんの母親がピアニストで、トームスさんは音楽が好きだった。夕飯をご馳走になってピアノを一杯弾いてもらった。その日最後に彼が十五歳のときの作曲の第三楽章を弾いた。音楽は国境を越えて力があることを私は身近に感じた。トームス夫人は私たちが泊まってゆくようにベッドの用意をしておいてくれたのに、私は論文の資料をピルグリムファウンデーションに置いてきたのでそれを断って帰った。私は自分の母とのやりとりを思い出した。

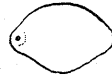
アーミステイス・デー

一九五二年は朝鮮戦争の最中で、トルーマン大統領は朝鮮に原爆を使用するという噂も流れていた。日本は隣国だからただではすまないだろうと私は心配した。十一月十一日は休戦日（アーミステイス・デー）とすることが米朝間に合意されて私は胸を撫で下ろした。その日は学校は休みになった。



ヴィザの書換え—シカゴ

米国に来てから一年経過し、ヴィザの切り替えのために、ミネアポリスの隣の市セントポウル日本領事館に行ったところ、平和条約が発効になって、それ以前のヴィザはすべて無効になり、移転になったシカゴの日本領事館にできるだけ早く行くようにと言われた。シカゴには汽車で十時間、バスで十二時間かかる。勿論飛行機で行くことなど当時の留学生には考えられもなかった。十一月二十七日の夜十一時の汽車で、ミネアポリスを出発し翌朝シカゴに着いた。午前中にヴィザの手続きをすっかり済ませたときには安心した。異国では思いがけないことで心を乱される。予め私の婚約者の父親の知り合いの日本人一世の塚原さんに手紙をだしてあり、クラークストリートという下町のアパートの二階の家を訪ねた。薄暗い応接間で初対面の塚原さんに挨拶をしたとき、そこに東洋英和短大の保育科の黒田成子さんがおられるのに気がつき、互いにあつと驚いた。黒田さんとは、二年ほど前に東洋英和の学生が愛育研究所に見学に来られてそれ以来知っていた。当時黒田成子さんはシカゴ郊外のエヴァンストンにあるナシヨナルカレッジという幼児教育で有名な学校で勉強しておられた。知らない土地で友人に会うほどうれしいことはない。それにしてもたった一日しかない土地で、どうして黒田さんに会ったのだろう。長い間不思議に思っていたので、この原稿を書いているとき黒田先生に電話した。黒田先生は父上がアメリカで牧師をしておられた関係で塚原さんを知っておられ、たまたまたった一日訪ねて偶然に私と会ったのだという。その後五十年間に



わたる交友を思うと不思議な出会いだった。その晩は塚原さんにもほんものの寿司をこ
馳走になり、日本人の一世と二世にあらためて尊敬の念を深くした。

私はDr. フラーからシカゴのノースウエスタン大学図書館に紹介状をもらっていた。ミ
ネソタ大学図書館にはなかった資料を見つけて丸一日そこで過ごして翌日の夜行でミネ
アポリスに帰った。

洗濯物

私がビルグリムファウンデーションに移って以来、トームス夫人は私の洗濯物を心配
して、私が毎週一抱え洗濯物をトームス家に持って行くと、すっかり洗って、アイロン
をかけ、届けて下さった。その度に果物とクッキーが籠の中に入っていた。いつもト
ームス夫人はだまっておいて帰ったところに籠をおいて帰ってしまうのでまるでサンタク
ロースのようだった。いま考えても感謝の念に満たされる。

一九五二年のクリスマスは、シユタウファ夫妻はネブラスカに帰り、ビルグリムファ
ウンデーションには私一人だった。私はクリスマスディナーへの招待をすべて断って、
「とっし」と、もうひとりの日本人留学生で化学専攻の島内さんをビルグリムファウン
デーションに招いた。「とっし」が古典から最近代までのいろいろな曲を解説つきで弾
いてくれた。たった三人の豪華なクリスマスだった。